

少年と死神

男の子がいました。彼は幼い頃、両親に捨てられた所を発見されましたが、重い病気を患っていることが分かり、彼は治療を施されながらずっと入院していました。

そんな彼の唯一の楽しみは本を読むことです。本に出てくるまだ見ぬ海や空に思いを馳せます。しかしどれだけ本を読もうと、彼の心の奥の不安は晴れません。

ある夜、彼は寒気を感じ目を覚ましました。暗い中目を凝らして周囲を見ると、ベッドの横に影のようなものが立っています。不思議と恐怖はなく、彼が「誰ですか」と聞くと、「死神」と影は答えました。「僕は死ぬのですか」彼がまた問うと、「そうだ」と返ってきました。

この死神はひねくれ者でした。昔は人が好きだったが、死神なので人に恐れられたり罵られたりするようになって、だんだんと人が嫌いになり、人を悲しませようとするひねくれた死神になりました。そんな死神が少年に聞きました。「海は好きか？」「うん」少年が答えると、「あれはもう全て干上がって無いんだ。ま、お前はどちらにしても見ることはないが」死神はケラケラと笑いました。少年は「そっか」と言うだけで悲しんだりする様子はありません。

死神は聞きました。「空は好きか？」「うん」少年は答えました。「あれはただの壁紙だ」死神はそう言うのと、病室にある窓を開けて空を爪でひっかきました。すると、ひっかいた部分がベロンと垂れ下がり、その奥には灰色の壁が見えました。それを見て死神はケラケラと笑いましたが、少年は「そっか」と言うだけでした。そんな少年を見て、腹ただしくなり「なんで、悲しくならない」と怒りました。すると少年が言いました「僕は空も海も好きだけ

ど、それよりもずっと不安だったことがあるんだ」「何だ」少年は答えます。「死ぬとき誰も傍にいないこと」死神はいつの間にか来ていたナースと医者に目をむけました。二人は必死に少年に何かを言い、肩を叩いています。少年にはその声も聞こえず、触られている感覚もありません。「そっか、そっか」と死神は頷きます。「しかし、ここには誰もいないぞ」死神は医者とナースもひっかきました。すると二人の皮膚がベロンと垂れ下がり、中から器械のような物が見えます。「機械だからな」と死神はまた笑おうとしましたが「違よ」と、少年の声に遮られました。少年は「君が来てくれた」と死神を見つめ微笑みました。死神は啞然としました。こんな事を言われたのは初めてです。そして少し悲しそうな様子で「行こう」と言い、少年の手を取って病室の窓から飛び出しました。少年と死神は空高く昇って、やがて夜闇に消えました。それからその死神は人を悲しませるようなひねくれ者ではなくなりました。